



(写真提供：丸山 信明 様)

令和8年を迎えて

会長 田口 順子

令和8年を皆様と共に迎えられましたこと、誠に嬉しく思います。皆様いかがお過ごしでしょうか。今年も早3か月が経ち、月日の流れが年々早く感じており、周りでも同じ声を聞くことが増えてきました。

私事ですが、昨年がんの発病から20年が経ちました。当初、医師から「卵巣線維肉種」という名の希少がんと伝えられましたが、家族に「がん」を患った者はなく、知識も全くなかったため、「がん」の怖さを知りませんでした。その後「がん」について勉強するにつれ、自分はあまり生きられないのでは・・・と考えるようになりました。

一方で、「短い人生であるなら、やりたい事は全てやって逝こう。やり残した事がない人生を送ろう！」という思いが強くなりました。フラワーの仕事最後まで続けること、花供養をすること、そして10年目に再発した時には、「がん」を罹っている人達に何かの形で役に立ちたいとの思いがますます膨らんでいきました。その1つが、がん患者会や相談員としての参加です。

私は、がん患者になって良かったと思える事が沢山あります。素晴らしい医療関係者の方々と知り合えたことや多くの患者さんと知り合えたこと。そして、「がん」は私の人生を変えてくれました。

「キャンサーギフト (がんの贈り物)」は、決して嘆くことばかりではありません。発病してからの人生は神様からの贈り物、ご褒美だと思っています。嘆いたり、悲観している時間が全くない日々です。

この気持ちを持って生涯走り続けて行くつもりですので、皆さんも一緒に歩いて行きましょう。

第27回がんフォーラム報告（2025年10月22日開催）

特別講演「あきらめない治療 ～ がんゲノムを中心に ～」を聞いて

講師：茨城県立中央病院名誉院長・練馬光が丘病院管理者 永井 秀雄 先生

会員 田所 厚子

次の5つについてお話がありました。

1. あきらめない治療（39歳女性の治療事例）
2. 茨城県がん対策推進基本計画について
3. がんのしくみについて
4. がんの薬物療法について
5. がん遺伝子パネル検査について



1. あきらめない治療

こちらの事例はとても感動的なお話で、絶対に治せるといふ先生の熱意と患者さんの頑張りに心打たれるものがありました。

その患者さんが茨城よろこびの会に手記を寄せてくださいました。（要点を抜粋して掲載）

「永井先生の病気についての丁寧な説明と、『手術してくれる先生が見つからなかったら、僕が切ってあげる。できてしまったら切ればいい。』との力強い言葉に感謝しかありません。先生に出会わなければ、今の私はありません。病気にかかり人に寄り添うことの大切さを先生から改めて学ぶことができました。私も、あなたと共にあります。」

- ・ 39歳女性の病気の診断：右後腹膜悪性パラガングリオーマ(傍交感神経節腫)
右肺転移 頸椎 C4 転移

巨大・富血管性腫瘍切除は、茨城県立中央病院では体制不十分と永井先生が判断。筑波大学附属病院に紹介しても術中死のリスクがあると言われ、不安が増強したとおっしゃいます。そこで、永井先生が信頼する自治医科大学附属病院外科を紹介。

- ・ 2016/9/13 自治医科大学附属病院外科で腹部腫瘍切除(永井先生立ち合い、無輸血)
- ・ 2016/9/23 退院。病理診断：パラガングリオーマ
- ・ 2016/11/24 茨城県立中央病院呼吸器外科で右肺部分切除(無輸血)
- ・ 2016/11/28 退院。病理検査はパラガングリオーマ転移に一致

頸椎転移は手術困難部位のため、つくばセントラル病院にサイバーナイフを依頼。5回実施するも、効果なし(縮小なくPETで光る)。東京大学医学部附属病院整形外科に頸椎手術を依頼するも手術に消極的なため、永井先生の信頼する三井記念病院整形外科を紹介。

- ・ 2017/11/1 三井記念病院整形外科でC4頸椎椎体切除と自家骨移植(無輸血)
- ・ 2017/11/8 退院。病理検査はパラガングリオーマ転移に一致
- ・ 2025/10月 現在、再発なし9年目

このように、必ず方法があるはずとの永井先生の信念とご苦勞のお陰で治療が成功しました。がんの治療において、「あきらめない」精神の大切さを気付かせていただきました。

永井先生が若い医師に伝えてきた10ヶ条が示されていました。

その中で、特に強調されていたのが、「⑤工夫をしなさい。諦めずに工夫をしなさい」です。

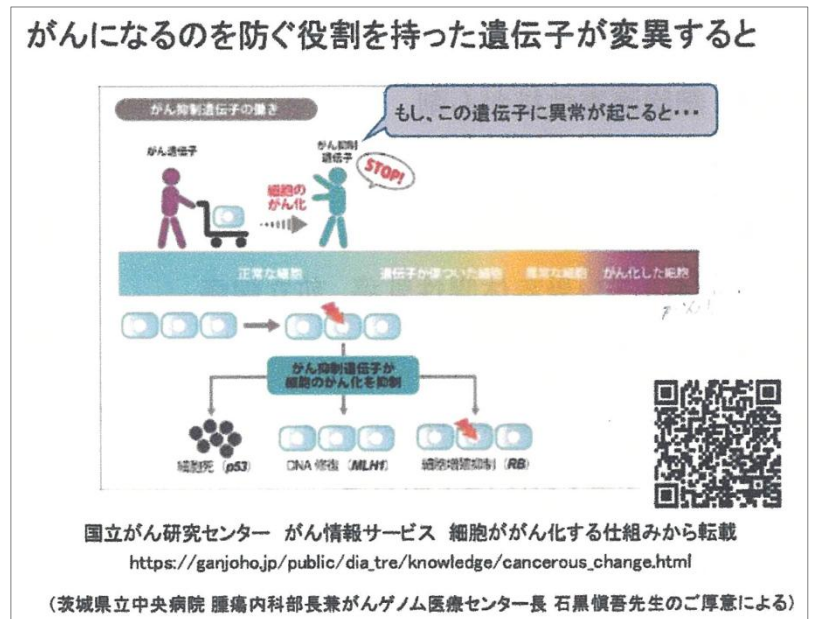
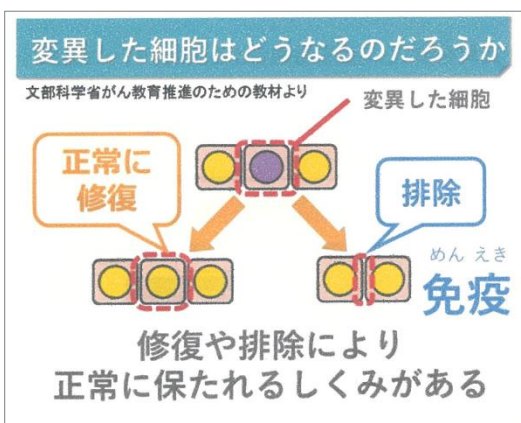
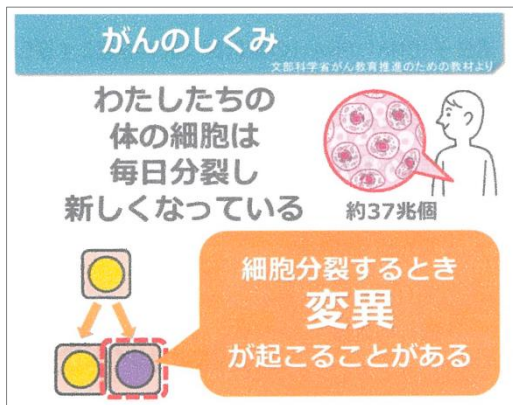
2. 茨城県がん対策推進基本計画について

平成 19 年(2000 年)がん対策基本法施行。茨城県では、その前から総合がん対策推進計画第一次計画(平成 2 年~14 年度)を策定し、がん対策に取り組んでいたお話がありました。それにも関わらず、茨城県ではがん対策が遅れているとの不評を聞いていました。理由は分かりませんでした。永井先生は令和 4・5 年度のがん対策推進会議議事録を示され、がん患者の体験調査の結果にあるとおっしゃいました。例えば「納得のいく治療を受けているか」の質問に「そうだ」と答えたのは 68%しかない。これはダントツに低いと驚かれたそうです。

また、茨城県のがん対策推進組織図も示され、「がん」という病気の治療の難しさ複雑さを感じました。県民一人ひとりが真剣に「がん」に向き合い、「がん」を知り、早期発見・早期治療に取り組まないと、治療法がいくら進歩したとはいえ死亡原因第 1 位から下がらないと思いました。また、茨城よるこびの会のがん啓発活動の意義がここにあると改めて認識しました。

3. がんのしくみについて

変異した細胞に対して、修復や排除により正常に保たれる仕組みがありますが、「がん」になるのを防ぐ役割を持った遺伝子に異常が起こると、細胞のがん化を防げなくなります。



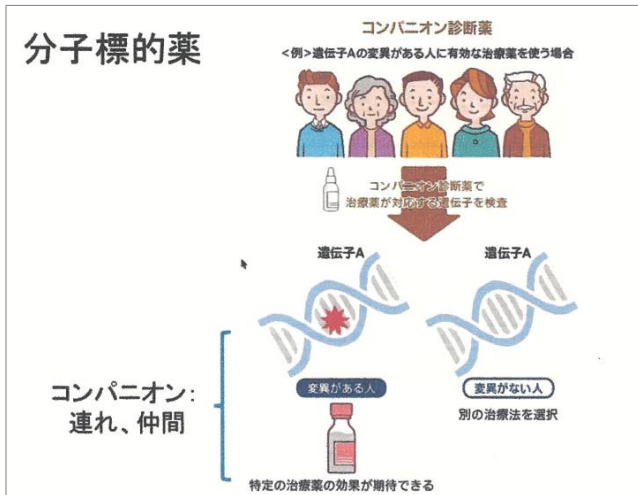
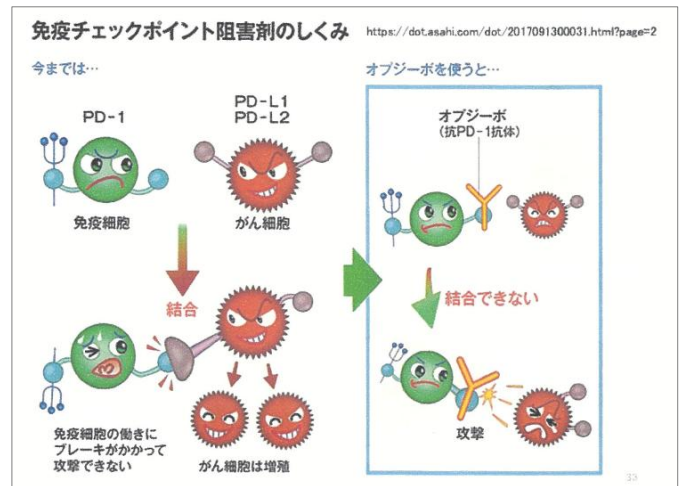
(図は全て講演資料より引用)

4. がんの薬物療法について

- 薬物療法の種類
- ・細胞障害性抗がん剤 ⇒ 狭義の抗がん剤
 - ・内分泌療法剤 ⇒ ホルモン受容体陽性乳がん、前立腺がん
 - ・分子標的薬剤 ⇒ 血管新生阻害薬、細胞内シグナル伝達阻害
 - ・免疫チェックポイント阻害薬 ⇒ がん細胞が免疫細胞を抑制している部分を開放

右図「免疫チェックポイント阻害剤」は、ノーベル賞を受賞した本庶 佑氏が発見したものです。

副作用としては、免疫過剰になると、免疫疾患類似病態の出現があるそうです。その中でも間質性肺炎が心配になるとのお話でした。



左図は「分子標的薬」をどのように使用するかを示したものです。コンパニオン診断薬治療に対応する遺伝子を検査します。変異がある人には特定の治療薬の効果が期待できるので、分子標的薬を使うそうです。変異がない人は、別の治療法を選択します。その他にも様々ながん治療薬の一覧表を示していただきました。

5. がん遺伝子パネル検査について

これまでの遺伝子検査は、コンパニオン診断で一度に調べられるのは1つの遺伝子異常のみでしたが、新しく遺伝子パネル検査ができ、一度に多数のがん関連遺伝子を調べることが可能になり、2019年6月に保険適用となりました。2019年12月から茨城県立中央病院で導入され、現在は、筑波大学附属病院、土浦協同病院でも受けられます。

どこに初めに出来た「がん」かは関係ない

胃がん 膵がん 大腸がん 原発不明がん

がんの病名が違っても、同じ遺伝子変異でがんになっているのなら、同じ薬が効くのではないかと？

がん細胞の 遺伝子変化に着目して治療を選ぶ時代へ

(茨城県立中央病院 腫瘍内科部長兼がんゲノム医療センター長 石黒慎吾先生のご厚意による)

検査はがん細胞から行いますが、がん細胞が採取できないときの次善策として、血液検査でも行えるそうです。

がん遺伝子パネル検査ができることによって、どこに最初に出来た「がん」かは関係なく、がんの病名が違ってても、同じ遺伝子変異でがんになっているのなら同じ薬が効くのではないかと、遺伝子変化に着目して治療を選ぶ時代になったとのお話がありました。

もう全てのがん治療薬をやり尽くした？

あと一つしか治療が残っていない。もう次の治療がない、
どうしよう……

初めから標準治療などない原発不明癌、希少癌
どう治療したらよいだらう……

⇒ あきらめない。

⇒ 担当医にがんパネル検査をお願いしてください。

(茨城県立中央病院 腫瘍内科部長兼がんゲノム医療センター長 石黒慎吾先生のご厚意による)



がん遺伝子パネル検査の適応 どういう患者さんが検査を受けられるか

1. 固形がん(白血病など血液がん除く)
2. 抗がん剤(標準治療)が終了(終了見込み)
3. 標準治療など初めからない希少癌など
4. 検査後に化学療法を施行できる方
(結果判明に2か月弱かかるので余裕必要)

検査に適したがんの検体(組織)があるのが大前提

(茨城県立中央病院 腫瘍内科部長兼がんゲノム医療センター長 石黒慎吾先生のご厚意による)

がん遺伝子パネル検査の概要

- ◆ 一生で一回のみ検査可能
- ◆ 結果が戻るのに2か月かかる
- ◆ 費用は56万円ですが、
抗がん剤治療中の方は限度額認定などを受けていて
その月の支払い費用は変わらない場合が多い。
- ◆ 入院中は検査できません、必ず外来で検査
- ◆ 主治医からの紹介状が必須です。
- ◆ まだ、標準治療をしていない方は検査できません。

(茨城県立中央病院 腫瘍内科部長兼がんゲノム医療センター長 石黒慎吾先生のご厚意による)

がん遺伝子パネル検査を受けられるかどうかは、必ず現在治療を担当している主治医に確認してください。主治医の紹介状がなければ、この検査は受けられません。(検査を行っている病院に直接相談するのは、時間の無駄になってしまいます)

永井先生からは、がん遺伝子パネル検査の仕組み、がん治療にどのように取り入れられるのか、問題点は何かなど、詳しくお話をさせていただいて、がん治療に明るい道が開けたことを嬉しく思いました。ただし、がんパネル検査は時間がかかる(2か月)ということで、そこが改善されるともっと利用範囲が広がり、救われる人が多くなるのではないかと思います。

がん体験談①「私と家族のがん ～別れと支え、これから～」

市塚 淑江

私自身の乳がんのこと。家族のがんのこと。患者として支えられたこと。家族として支えたこと。両方を経験して、思ったことやこれからのことについてお話しさせていただきます。

左胸乳がんと診断されて12年間通院し、手術、抗がん剤、放射線治療、ホルモン治療を受け3年前に卒業となりました。現在は年に1回の検診を行っています。

私の乳がんは「浸潤性小葉がん」というもので、乳頭や乳管にがんができるのではなく小葉にできる希少がんに分類されるものです。主治医からは、「わずかなパーセントで珍しい『がん』だけれど治療法は一般的な乳がんと変わらない。心配することはない。」と説明されたので特に気にすることはなく治療を受けてきました。その乳がんが見つかったのは、毎年職場で申請して受診する人間ドックです。マンモグラフィではなく初めて受けた超音波検査(エコー)でした。

がんと告知された時は「ついに来た」という気持ちでした。母がすでに「がん」で亡くなっていて、姉



は胃がんで治療をしている時だったので、「うちががん家系」だと思いつくづきました。

主治医の見立ては、初期の左乳房の「浸潤性小葉がん」。腫瘍の大きさは10 mm。左胸部切除手術。その後、病理結果によって治療が始まるという説明でした。実際、手術をすると10 mmの腫瘍だけど、リンパ14本のうちの1本に転移あり、リンパ節郭清をしました。そして術後の病理結果から、抗がん剤TC療法4クール、放射線治療50グレイ、ホルモン治療10年間という提示がありました。抗がん剤についてはとても心配でしたが、「抗がん剤をすれば10年生きられると思ってほしい」と入院時の主治医が話してくれ、副作用で髪が抜けることについては、「乳腺外科の外来待合室にいる患者さんの8割くらいはウィッグです」と教えてくれたので、安心しました。そして先生の言葉を信じて「10年生きられる」と思い受けることにしました。

しかし、抗がん剤治療の副作用は本当に辛く大変でした。朝起きてすぐに動けない、手足はしびれ、爪はボロボロになる、味覚の変化や口内炎ができる、2回目以降から髪の毛が抜け始め、精神的にも不安で、副作用の辛さから投げやりな気持ちになってしまうところを夫やがん治療中の姉が励ましてくれました。

そして、もう一つ私には支えがありました。社会との繋がりです。今まで通りに仕事をすることが大きな支えでした。予想外の抗がん剤治療になってしまいましたが、無理のない範囲で予定通りに仕事をしました。中学校に勤務していたので、いつも通りに授業を行い、生徒と過ごすことで、抗がん剤の副作用の辛さを軽減させてくれました。生徒たちと保護者の方々には決して告げず、必要な部分だけを知らせました。職場の上司や同僚の温かい配慮、いつも通りに接してくれることがありがたく、私には本当に大きな支えでした。



放射線治療が始まると、午後2時半以降には職場から病院へという日々を約2か月近く送りました。勤務と治療のことを理解してくれ、いろいろな面でサポートをしてくれました。病院でも放射線科の先生との面談で、私が不安な気持ちを告げると「この病院で最高の治療をしていると信じて、治療を続けてください」と話してくれ、その言葉で安心し、毎月治療を続けることができました。その後10年間のホルモン治療が始まり、9年7か月経った頃、手首を骨折してしまい、主治医の判断でホルモン治療を終了し、3年間の経過観察フォローをしながら年1回通院し、現在に至っています。乳がん治療の12年間は生きるためにやらなければならない治療でしたが、病院の先生方、職場の上司や同僚、家族に助けられて生かされ、仕事を続けられたと思っています。

こんなふうに強くいられたのは、過去に経験した家族の「がん」が関係しています。母は半年近く腰が痛いと言い、時間的に余裕ができた時にやっと病院に行きました。「がん」が分かった時は、脾臓、すい臓、大腸に広がり、原発がどこか分からない状態でした。医師から言われたのは余命5か月足らず。40年前のことなので、本人には「がん」であることは伝えませんでした。最終的には肺に転移、腹水がたまり、何度か入退院を繰り返しました。それでも余命が5か月から3か月延びて8か月過ごすことができました。母が「もうこれで終わり。もっと生きたかったな。」と私と二人の時に言いました。すごく悲しかったです。自分がもっと「がん」について知っていたら、もっと支えられたと思いました。

姉は胃がんの手術をして10年間元気に過ごしました。その間に私の乳がんが見つかったので、治療に専念していた姉が、私にとって本当に頼りでした。お互いの「がん」のことをたくさん話しました。お互いがん患者同志で支え合っていると思いました。その姉が胃がんの治療10年が過ぎて完治と思っていたのに、再発してしまいました。姉は私が大人になってからの母親代わりでもあったので、母の時よりも更に悲しくて「もうだめだ」という絶望感を強く感じてしまいました。姉の前では常に笑顔で話したり、傍にいたいと思い、毎日病室に行きました。できることならもっと長く一緒に過ごしたかったです。

母の「がん」から姉の「がん」、私の「がん」の40年間、患者としても家族としても、必要だったのは「安心感」と「寄り添う姿勢」だったと思います。

患者は、希望が欲しいし、生きたい。でも他人の目を気にすることがあるので、自然に見守ってほしいと思いました。「がん」を特別視しないでほしいと思っています。

今や2人に1人が「がん」になる身近な病気です。医療も日々進歩しています。がん経験者としては自分の体に優しく、早期発見を心掛け、自分に合った治療をする。継続的にフォローし、不安な時は正しい情報を知り対応していくことが大切だと思っています。

私は「がん闘病」という言葉が好きではありません。12年以上「がん」と戦っているのではなく共存しているのだと思っています。乳がんのホルモン治療が始まる前に、主治医が「風邪をひいたら病院に行って風邪薬をもらって飲むでしょ。病気に合わせて治療することが大切」と話してくれました。先生の言葉は長い治療の心の支えになり、そのおかげで今の私があると思っています。

「がん」は、命の話にもなりますが、一人ひとりの生活や心を支えてくれる人がいることで、希望を持って、共存しながら過ごすことができるものだと思います。

自分のがん治療が落ち着いた頃から、私自身が、がんを経験した患者であり、家族であり、遺族である立場から、何かできることはないかと思っていました。患者会で同じ乳がんの人たちと話すことで元気が出たように、同じような「がん」の人達と関わりたいと思い、現在いくつかの病院でがんピアサポーターとして活動しています。まだまだ経験は浅いですが、この活動はできるだけ長く続けたいと思っています。そして母や姉の分まで、この世界を見ていきたいと思っています。

がん体験談②「肺がんサバイバー31年～多くの人に支えられて～」

会員 田所 厚子

がんが見つかった経緯と診断までの流れ

私の場合、人間ドッグで肺がんが見つかったのは、偶然のことでした。腹部の超音波検査をした時に担当の先生が、「膵臓が腫れていますね」とおっしゃいました。それでCT検査をすることになりました。



CT検査の結果、膵臓に異常は無かったのですが、右の肺に腫瘍が見つかりました。その時の内科の先生の慌てた様子に、ただ事ではないと直感しました。腫瘍が見つかったことで呼吸器外科に回されることになりました。すぐ言われたのは、手術をして腫瘍を採り細胞検査をした方が良いとのことでした。今回はそのことを考えて家族と来てくださいと言われました。

考えてもいなかった突然のことにびっくりしました。しかし私の気持ちは落ち着いていました。母が急性膵炎で亡くなり、一人暮らしだった父が胃がんで亡くなったのですが、その介護をしたことで「がん」の勉強をして、「がん」と向き合う心構えができていたのだと思います。父は特殊な胃がんで、町の検診で見つかった時はかなり進行した状態でした。胃の壁全体にがんが広がっていて、手術してみたら、お腹の中（腹腔）にがん細胞がばら撒かれて、がん性腹膜炎の状態でした。半年持てば良いでしょうと言われましたが、在宅で1年4か月頑張りました。

そんなことがあり、家に帰ってから、買ってあった「がん」の本を見ました。その本の肺の腫瘍の写真と私のCT写真がそっくりでした。主人にその写真を見せて「私はがんかも知れない」と言いました。

がんの告知が無かった時代に自分のがんを知った経緯

平成6年の頃は、患者本人に告知をすることは一般的ではありませんでしたので、「がん」だったと言うことは主人から聞きました。「がん」の手術の説明があった時に私から先生に「私はがんですか？」と確認しました。先生は「そうです」と一言いっただけで詳しい話は何もありませんでした。

私は「がん」のステージなどの言葉を知りませんでしたので、それ以上は何も聞けませんでした。どのように肺の手術をするか説明を聞き、手術後のことに不安がありました。手術を承諾しました。後で腫

瘍の大きさは 2 cm だったと聞きました。それでも早期だったという事で、抗がん剤などをしないで済みました。しかし右肺の 3 区画に分かれているうちの「下葉」という一番大きなところを切除し、手術の傷も大きく、肺上部の短い肋骨を 1 本切りました。肺の周りや縦隔のリンパ節も切除したと聞きました。

術後は、大きな手術をしてしまったなあ〜と体調の厳しさに困惑しました。それでもまだ 52 歳でしたから、ここから元に戻さなければならないという意欲はありました。

手術後の体の変化と苦悩

術後は傷の痛みで半年苦しみました。1 か月入院して退院した時は痛み止めの強い薬を 2 週間分頂きました。強い薬なのでいつまでも飲んでいると胃に穴が開くかも知れないと言われてびっくりしました。2 週間飲んでやめようと思ひ、その後は頂きませんでした。

胸から横に背中近くまで大きく切りましたが、1 本でも肋骨を切ったのは大きかったと思います。右側だったので、家事をする際に力が入りにくく、社会福祉協議会にお願いしてお掃除をしていただくボランティアさんをお願いしました。幸いに 5 名の方が交代で週 1 回 1 年間来てくださいました。当時、夫は単身赴任で家に居りませんでしたので、お世話になり大変助かりました。元気を取り戻すのに大きな力になりました。

手術後の定期健診で胆のうの異常を告げられて苦悩したこと

半年後の定期健診で「胆のう」に何かがあると検査をしてくださった先生が言いました。検査後の外来診察で主治医の先生に手術を勧められました。あまりの早い展開にびっくりしました。

肺の手術で体の負担があまりにも大きかったので、先生の話に返事が出来ませんでした。それで 1 年間は 3 か月ごとの経過観察にしてくださいました。多分先生は「がん」を疑ったのでしょう。

どんな時に「胆のう」の手術が必要なのか、調べたり、考えたりさんざん悩み 1 年間で 10kg 体重が減りました。1 年経ってやはり手術をした方が良くと言われて、手術を決心しました。

腹腔鏡手術で胆のうを切除しました。幸いに胆石があっただけで腫瘍はありませんでした。しかしその手術の後は便秘に苦しんだり、胃の中に小さな出血が点々とできて、「出血性胃炎」と診断を受けたり、そのために食欲が無くなり 37kg まで体重が落ちてしまい、このままどうなるかとても不安でした。

その後、「带状疱疹」が肺の手術の傷の上にてできて治った後も神経痛が残りその痛みでまた苦しみ、うつ状態になりました。胃の方は水戸の胃腸科に通院していたのですが、車の運転が嫌になり行けなくなりました。

どうしようもなくなり、徒歩で行ける地元の病院に行き帯状疱疹の神経痛の話をしてしましたら、ペインクリニックの先生に電話で治療法を聞いてくださいました。その時は痛みが出てから半年が過ぎていたので抗うつ剤が処方されました。この薬で痛みが治まり、うつ状態も改善しました。命が助かった、そんな思いでした。今も抗うつ剤は飲んでいます。胃炎はすっかり綺麗になりました。

がん患者と家族の会「茨城よろこびの会」に入会して

茨城よろこびの会は昭和 59 年（1984 年）6 月に発足して 40 年になります。私が入会したのは平成 6 年（1995 年）ですから 30 年になります。会員同士の交流と情報交換のほか、年 1 回会員が力を合わせて、今日のような「がんフォーラム」を開催しています。がんの啓発と医師を講師に新しい情報などをお伝えしています。このような活動を通して会員同士の絆が強くなったと思います。悩みを打ち明けられる仲間の繋がりがあつたことで、術後の辛さを回復する力が湧いてきました。

入会した当初は傷の痛みを当時の会長に訴えていたので、たびたび電話で様子を聞いてくださりました。後で腫

たりして、そのことがとても励みになりました。当時の初代会長はお亡くなりになりましたが、現在は3代目の田口会長が頑張っていて会を運営してくださっています。

術後の体力づくりに励んだこと

先生から運動をするように言われました。病院内の呼吸法教室に参加したり、ウォーキングをしました。呼吸法を利用して足の運びと、呼吸を合わせて歩きました。目標は1日5,000歩。はじめは周りの景色を見る余裕がありませんでしたが、身体の状態に余裕が出るにつれ、周りの景色が見えて季節の野に咲く花を楽しめるようになりました。肺のため、心臓のためと意識して歩き続けました。その努力が実って今があると思います。

第27回がんフォーラムに参加して（感想）

水戸信用金庫 井川 敬史 様



令和7年10月22日、茨城よろこびの会が主催する「第27回がんフォーラム がんを知り、がんと向き合おう」に参加しました。私は、永井 秀雄先生の特別講演「あきらめない治療～がんゲノムを中心に～」に興味を惹かれ、医療の最前線について学びを深めたいと考え参加させていただきました。また私自身も祖母ががんで亡くしているのです、ご自身やご家族ががんを経験している方の「生の声」に触れたいという思いも強くありました。

今回のがんフォーラムは、ご自身ががんを経験された方と、ご自身のがんの他に家族のがんの看護を経験された2名の体験談と永井秀雄先生の特別講演の2部構成となっていました。患者側の視点と医療現場の視点という異なる視点からの話を一度に聞くことができ、とても貴重な経験となりました。

第1部の体験談の中で特に印象に残ったのは、肺がんを発症し、肺の一部を切除しながら31年生活を続けてこられた方のお話でした。抗がん剤等の治療を継続しながら、多くの人に支えられながら今まで来られたということを淡々とした口調で語られるのを聞いて、困難な状況にあっても、希望を見失わず前向きに生活を営んでいくことこそが最も重要な治療のひとつであることを教えていただきました。私の祖母は15年前85歳の時に胃がんで亡くなりましたが、自覚症状が出て入院した時には末期状態であったため、本人に告知をしないという選択をしました。高齢のため手術が出来ず、余命数か月を診断されたので、次の桜は見られない覚悟していましたが、1年ちょっと生きることができ、もう一度だけ桜の花と一緒に見ることをできたことを思い出しました。

第2部では、茨城県立中央病院の名誉院長である永井秀雄先生が、がんゲノム治療の講演をしてくださいました。私はがんゲノム治療について、ほとんど知識がありませんでしたが、がんの仕組みからがん遺伝子パネル検査まで非常に分かりやすく説明していただき理解が深まりました。

先生が診られた患者の方の実例を挙げ、あきらめない治療の重要性について語られたことが非常に印象的でした。若い医師に伝えてきた10ヵ条については、少し見方を変えれば自分にも当てはまることなので、何事もあきらめずに工夫していこうと思いました。

がん治療の最前線では、免疫チェックポイントの阻害薬によって、自己の免疫機能のブレーキを解除することや、遺伝子の変異状態を調べて、一番効果が高いと考えられる治療を選択する時代になっていることを知り、安心感に繋がりととても良かったです。

今回のフォーラムに参加して、今まで「がん」は治すことが難しいものだとイメージだったものが、体験談を聞くことや最新治療の進歩を知ることで、あきらめないことが大切だということを知りました。

最後に、貴重な経験を語っていただいた市塚さんと田所さん、お忙しい中講演していただいた永井先生、フォーラムを開催していただいた茨城よろこびの会の皆様に心より感謝申し上げます。

行事予定

○茨城よろこびの会 ※詳細（日時・場所等）が決まり次第連絡いたします。

- ・ 3月 「役員会」※令和7年度の反省、8年度事業計画
- ・ 5月 「令和8年度定期総会」
- ・ 8月 「納涼会」
- ・ 9月 「ひたちなか市スポーツフェスティバル」参加
- ・ 10月 「第28回がんフォーラム」



○レディスピア県央

- ・ 4月9日（木）「総会」令和8年度年間行事計画
- ・ 毎月第2木曜日に定例会を開催（水戸市福祉ボランティア会館（ミオス）第2小研修室）

○レディスピア県西

- ・ 毎月第2木曜日に定例会を開催（しもだて地域交流センターアルテリオ）

年会費納入のお願い

令和8年度年会費の納入をお願いいたします。年会費は1,000円です。年会費は、会合のときに会計に直接納めていただくか、銀行又は郵便局でお振り込みください。

<お振込先>

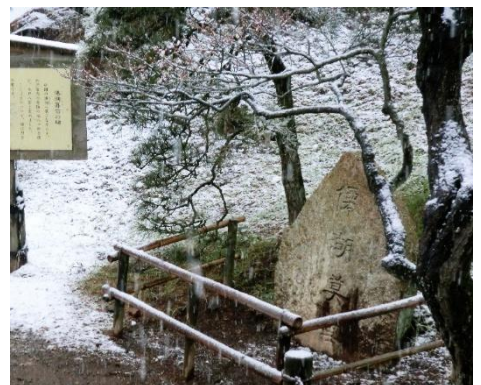
・ 銀行振込 常陽銀行 本店 普通6848239
茨城よろこびの会 会長 田口 順子

・ 郵便局振込 通帳記号 10640
口座番号 27057181

編集後記

梅の季節になりますと、私は会報「よろこび83号」（平成28年1月1日発行）の永井 秀雄先生の連載シリーズ第2回「水戸八景」を思い出します。先生は偕楽園の南斜面に座している「仙湖暮雪（せんこのぼせつ）」に何度も足を運びチャンスを狙って、ついに2011年2月11日に撮影することが出来たそうで、小さな碑は梅と松に寄り添われ、木々はうっすらと雪をかぶっている写真です（右写真）。

撮影から1か月後に東日本大震災が襲い、偕楽園の南崖は崩れてしまったとも書かれていました。永井先生は茨城に赴任されてから可住面積の広い県の医療を理解するため、地理・地勢を知るべく県内全44市町村を2年半で踏破される様子をシリーズで書かれています。時々、保存している「会報よろこび」を引っ張り出して懐かしんでいます。（広報委員 飯田 則子）



発行人 茨城よろこびの会（がん体験者と家族の会）

会長 田口 順子

連絡先 けんこうリンク（TEL 029-241-0011）